

論文

10世紀末『落窪物語』の「はべり」(補遺)

—— 地下層から貴族への使用例に見る対者敬語化のしくみ ——

森 山 由紀子

同志社女子大学・表象文化学部・日本語日本文学科・教授

“Haberi” in “*Ochikubo Monogatari*” (2)

—— The Mechanism of the Development of Addressee Honorifics ——

MORIYAMA Yukiko

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Culture and Representation,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Professor

1. はじめに

1.1 平安時代の「はべり」が持つ「意味の重層性」

平安時代の「はべり」は、聞き手に対する敬意¹を表す働きをもつが、現代の「です」「ます」といった丁寧語の在り方とは違う、いわば「不完全な対者敬語」である。その「不完全」さとしてはまず、阪倉篤義(1952)が指摘する次の2点がある(森山2004a)。

- ①尊敬語に下接して用いられることが極めて少ない。
- ②すべての文末に規則的に用いられるわけではない。

このうち②は、「丁寧語」の文文化の問題で、「まらする」などの中世語にも認められる現象(森山2003)であり、より大きな視点でとらえるべき課題であるといえる。

一方、①は、話し手と聞き手の関係だけではなく、話題の中身にも使用の有無を規定されているということであり、この点をもって「はべり」は、「素材敬語」と「対者敬語」の中間的な性質を持つとみなされる。小田勝(2022)は、次の(1)(2)のように述べる(下線筆者)。

- (1) 中古の「侍り」は尊者を主語として用いることはないから(中略)現代語にいうところの『丁寧語』ではない(p.91)

- (2) 中世の「候ふ」は主語の尊卑にも話題にも関係なく用いられ、丁寧語²と設定してよいだろう(p.91)

その結果、「侍り」を「丁寧語」と区別して「丁寧語」とするのが、(3)の古典敬語の分類(小田2022)である(a

主語尊敬語、b補語尊敬語は省略)。

- (3) c. 「僧都、女を助く」となむ、思ひ給ふる。…「自卑敬語³」。聞き手に対する述者の畏まり・遜りを示す⁴。
- d. 僧都、女を助け侍り。…「丁寧語」。自卑性を捨てて、単に聞き手に対する畏まり・遜りの気持ちだけを表す
- e. 僧都、女を助け候ふ。…「対者尊敬語」。聞き手(読み手)に対する敬意を直接的に示す(p.90)

上記(3)d「丁寧語」の記述のうち、「自卑性を捨てて」「単に～だけ」というのは、次の(4)のような話者を主語としない用法を(5)のように解釈し、c「自卑敬語」と区別し⁵たものである。

- (4) 夜ふけ侍りぬべし(源氏物語・夕顔)(p.91)

- (5) 自己側とは無関係の事態について、聞き手に対して畏まりの気持ちだけを表す方法に踏み出した(p.91)

ただし、自卑性を「捨てて」しまったのならばこの段階ではすでに関係ないことなので、「敬意」の説明としては、

- (3) d. eは(6)(7)のように整理できる。

- (6) 丁寧語(中古侍り) 聞き手に対して畏まり・遜りの気持ち⁶を示す

- (7) 丁寧語(中世候ふ) 聞き手に対する敬意を直接的に示す

(6) が「畏まり・遜り」という話者側の態度を示すことで間接的に聞き手への敬意を表すのに対し、(7) は直接聞き手への敬意を表すという説明がされていることがわかる。では、この間接性と直接性の違いはどこからくるのか。

一方、(4) の例があることで(5)「踏み出した」ということは、当時の「はべり」には、それ以前の用法も存在しており、両者が混在していたということでもある。また、それとは別に、小田勝(2015)は、平安時代の「はべり」に、(8)(9)のような「被支配の尊大表現」があることも指摘している。

(8) いと恐ろしきことかな。また[コノ蔵ヲ]開くる
人やあると見侍れ」とて(うつほ・蔵開上)⁷

(9) 行き過ぐるままに、「かく立てるはなぞ。居侍れ」
とて、傘をほうほうと打てば(落窪)

このように、中古の「はべり」はすべて「丁重語」(小田勝2022)であったわけではない。つまり(5)のように言えるのは、「自己側と無関係の事態」を主語とすることができるとい点が重要な点であって、それ以外の意味がなかったわけではない。森山(2011)では、(4)のタイプの「はべり」を「新型はべり」と仮に呼んだが、「対者(聞き手)」に向けた敬意を表現したものの中にも、話者を主語とする「旧型はべり」は多数存在する。一方で、「旧型はべり」の中には、(8)(9)のように、対者敬語以外の用法で用いられたものも存在する(図1)。

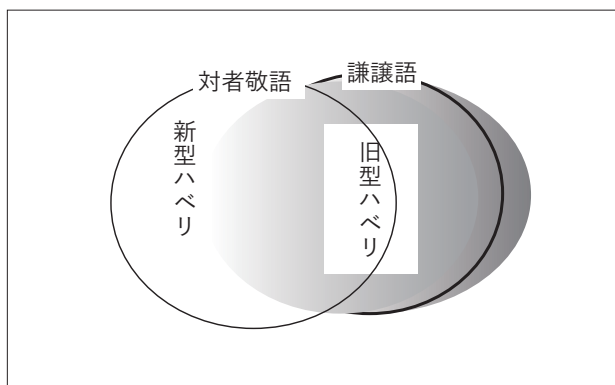


図1 用法の範囲と敬語としての機能

平安時代の「はべり」に見られる、こういった「意味の重層性」(森山2011)を詳細に分析し、「敬意」の方向として、話題の人物に向けられた「はべり」、対者に向けて用いられた「はべり」、「敬語」ではない実質的な意味を持つ「はべり」、さらに、それぞれの主語の位置づけの制限の在り方を峻別することは、上代の「被支配待遇」(石坂正

蔵1933)が「対者敬語」へと変化していく意味変化(一種の「文法化」)の仕組みの解明につながる。また、「はべり」が、日本語における最初の「対者敬語」であることを考えると、その対者敬語化の過程は、変化の仕組みが未だ十分に明らかにされたとはいえない⁸、日本語における対者敬語の成立の過程でもある。

1.2 「対者敬語化」を判断する2種の視点

1.2.1 発話現場で完結するか否かという意味変化の視点

「はべり」の、「素材敬語」から「対者敬語」への移行、すなわち「対者敬語化」を観察する上では、意味変化の側面から次の2つの観点が考えられる。

I 命題的な意味がどれくらい残っているか。

II 発話現場的な意味がどれくらい関与しているか。

I については、動詞「はべり」が本来有していたと考えられる、「陪侍する」(Aが貴人Bの傍にいる・仕える)という意味のうち、「存在」すなわち「あり」の意味が残存しているかどうかという観点である。IIは、前節で問題にした、「はべり」の主語の問題を含め、「はべり」の使用と発話現場(話者や聞き手)、あるいは話題の内容がどのように関係しているかという観点である。

石坂正蔵(1933)は、上代文献の「はべり」が、実質的に「貴人の傍に存在する」ことを表す「サモラフ」とは異なり、実際は傍にいない場面でも用いられ得ることを指摘し、次のように述べてその用法を「被支配待遇」と名付けた。

(10) ある人(又は物事)の動作存在が其の他のある人(や神)の勢力の支配下にある如き意識から、その人(や神)との被支配の関係において言表する待遇を言ふのである。(石坂正蔵1933)

この説明はつまり、《人物Aの行為に「はべり」を用いるのは、「Aは支配者の支配下にある」と話者が「被支配的立場から」言表することで、そこでは話者から支配者への「待遇」(すなわち敬意)が表されている》ということであり、図2(次頁)のように表することができる。この段階の「はべり」は、Iの観点では、「存在」の意味がなお残存している段階であるということになる。

では、IIについてはどうだろうか。まず、この仕組みは、主語への敬意を表す「主語尊敬語」に対して、主語「でないもの」へ間接的に敬意を表す「非主語尊敬」(森山2003)、すなわち一般に言う「謙譲語」の一種であるといえる⁹。もともと、一般に言う「謙譲語」にあたる小田勝(2022)の「補語尊敬語」と異なり、「被支配待遇」の場合は、動作主と

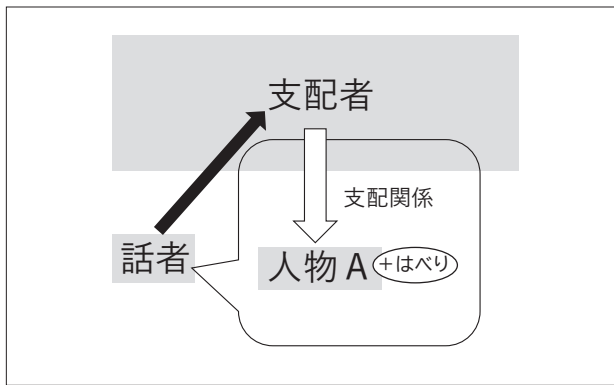


図2 被支配待遇

敬意の対象である「支配者」との間に格関係などの明確な結びつきはない。従って、厳密に言えば「支配者」は話題の中に存在するわけではなく、話者の意識の中にあるものだが、また一方で、「発話現場」に存在するわけでもない。そういう意味で、「被支配待遇」は、あくまでも、第三者である「支配者」と、「話者」との関係を表す「素材敬語」であり、発話場面との関与は「話者」のみ（聞き手は関与しない）ということになる。

この「被支配待遇」の「はべり」が、どのようにして「対者敬語」となっていくのか。森山(2010)、森山・鈴木(2011)で仮に「仮想被支配用法¹⁰⁾」と名付けた、『伊勢物語』(900年前後成立)の手紙文の中の2例は、被支配待遇(図2)の「はべり」の意味を利用し、話者自身を主語とする動詞に補助動詞「はべり」を付して、聞き手を「仮想」の支配者とすることで、話者から聞き手への敬意を表した用法であると考えられる。

(11) (藤原敏行→女)「今まうでく、雨の降りけるをなむ見わづらひて侍」(今参上する。雨の降っているのを見て迷っている)(107段)

(12)「あさましく対面せで月日の経にけること。忘れやし給ひけむと、いたく思ひわびてなむ侍る」(忘れなさったのかと、とても思いわびた状態でいる)(46段)

このように、眼前の聞き手（この場合は手紙の相手）を敬意の対象として「はべり」が用いられはじめた段階があったとして（それが『伊勢物語』の時代であるとは言えないが）、この段階の「はべり」は、話者を主語としなければならなかったのではないかと考えられる。「被支配待遇」(図2)として支配者に対する敬意を表す場合、その主語は支配者の支配下にいる人物でありさえすれば、話者にとっては一般的な第三者でも構わない。しかし、誰かの存在を表現することで「聞き手」への敬意を表現するためには、話

者と聞き手の関係、および、「はべり」が付される「誰か」と聞き手との関係が紐づけられていなければならないわけで、そのためには、「誰か」が「話者自身」である必要があると考える(図3)。

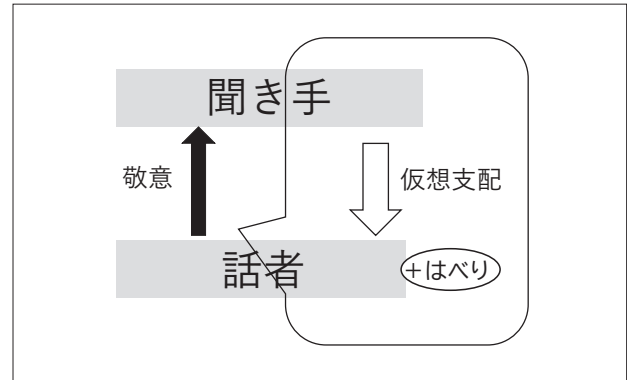


図3 仮想被支配用法

この「仮想被支配」用法の「はべり」を、Iの観点から見れば、少なくとも(11)(12)の2例については、そのような状態で「いる」と、「存在」の意味の片鱗を残している。しかし、それが偶然なのか必然的なのかは用例が少ないため現時点では不明である¹¹⁾。また、IIの観点から見れば、「話者」と「聞き手(読み手)」という、発話現場を構成する人物間での敬意の表現である一方で、「話者」は主語でもあらねばならない。すなわち、話題の人物を兼ねているという点で、発話現場だけが関与しているのではなく、話題内容の関与も残っているということになる。このように、I、IIの両観点ともに「自卑性」を捨てた「丁寧語」(小田(2022)のd)の前段階の要素を残す。

では、これは「対者敬語化」としてはどのような段階にあるといえるのだろうか。もちろん、「敬意」の方向という点から見れば、この時点ですでに「敬意」は「聞き手」に対して向かっているわけであるから、「対者」に対する敬語である。しかし、本動詞が有していた意味を残し、その運用に、話題(内容)による制限がかかるという点を重視すると、「完全に発話場面だけで完結しない」、「不完全な対者敬語」ということになる。連続性がある中でどの段階を「対者敬語」と呼ぶべきであるかは定義上の「ゆれ」に過ぎず、術語の混乱を招かないためにもここで命名することは控えたい。しかし、平安時代の「はべり」が、内容(話題)に関わる世界での敬語から、発話現場で完結する「完全な対者敬語」へと変化する「対者敬語化」の過程にあるということは確かである。本稿の関心は、その「過渡期」において、具体的にどのような仕組みでその変化が起

こったのかという点にある。

1.2.2 「はべり」の使用頻度という視点

そして、「対者敬語化」を考える上で、もうひとつ見落としてはならないのは、ハベリが発話現場で実際にどのように運用されているのかという問題である。「対者敬語」として用いられているならば、ある一定の話者と聞き手の関係においては、ある程度恒常的に「はべり」が用いられるはずではないか（森山2011）。同じ関係間で行われた多くの発話の中で、そこだけ単発的に用いられた「はべり」は、「話者」と「聞き手」の関係に応じて用いられるべき「対者敬語」の標準的な用法とはいえない。

では、どのくらい用いられていれば恒常的な使用だといえるのか。冒頭に述べた通り、この時代の「はべり」は「すべての文末に規則的に用いられるわけではない」のであって、現代語の「です」「ます」のように、その「欠落」を判断する基準がない。また、素材敬語のように出現可能な箇所を明確に予測することも難しい。

そこで、森山（2022b）では、『落窪物語』の会話文の全数調査に基づき、会話の中で「はべり」がどのくらいの頻度で用いられるかの目安となる「ハベリ指数」を関係ごとに算出した。具体的な算出方法は次の通りである。

①『落窪物語』全発話の話し手と聞き手の組み合わせ212組¹²のうち、4発話¹³以上存在する80組¹⁴から複数の話者または聞き手で構成される組を除いた74組を対象とする。

②各組ごとに使用された「はべり」の数を、当該話者から当該聞き手への全発話の「文¹⁵」の数で割る。

上記の方法で算出した「ハベリ指数」で、使用頻度のランクを仮に設定し、それぞれのランクに属する組数を表1に示した¹⁶。この表を見ると、1～2文に1回以上「はべり」

表1

仮ランク	頻度	組数
無	0.00	34組
低頻度	0.01～0.99	14組
中頻度	0.1～0.69	21組
高頻度	0.7以上	5組

を使う「高頻度」の組み合わせがある一方で、使用してはいても、10文に1回未満の使用しかない、「低頻度」の組み合わせも相当数あることがわかる。

1.3 意味的变化と使用頻度と使用者層

では、「はべり」の意味変化の段階と、これらの使用頻度との間にはなんらかの相関があるのだろうか。ここまでの議論を踏まえると、高頻度の関係になるほど、より対者敬語化した「新型はべり」が増えると予測できる。

しかし、前稿（森山2022b）で、低頻度の組を中心に¹⁷、高頻度の組を対比対象として、前述の意味変化の観点からの分析を行った結果、高頻度の組には意外にも完全に発話現場で完結する「新型はべり」が見出せず、それらはむしろ中頻度の組の中で用いられているらしいことが判明した。

そこで、「はべり」使用頻度のランクごとに、両者の上下関係、および、話者の階層——「貴族層」（殿上人＝五位以上）であるか、地下層¹⁸（六位以下）であるか——に分けて組数を示した表2を見ると、高頻度で「はべり」を使用しているのは貴族層同士の組で、主人に向けた従者の言葉とみられる「上向きの地下層主語の発話」では、中頻度で「はべり」を用いていることがわかる。つまり、「対者敬語化」の進んだ「はべり」は中頻度で用いられており、特別に高頻度で用いられていると見える層では、「対者敬語」

表2

頻度	上向き			夫婦		同等・下向き		独言	特殊 ¹⁹	合計
	話者	貴族	地下	貴族	地下	貴族	地下			
無	0.0	2		4		14	4*	6	4	34
低	～0.99	1	1	1	2	5	2	1	1	14
中	0.1～	7	7	2			1		4	21
高	0.7～	5								5

※従者は個々に区別せず一括した。太線で区切った左上と右下、および、「低」（指数が0.1未満）の行は、いずれも対者敬語としては「ふさわしくない」用法で用いられた可能性がある組として、網掛けをほどこした。

ではない「はべり」が多用されている可能性がある。「対者敬語」ではない「はべり」の存在は、本来用いられないはずの同等以下への「はべり」が、低頻度で多く用いられていることから予測できる。このように、「はべり」の「対者敬語化」を考えるには、①意味的な変化の段階だけでなく、②それらが使用された人間関係、③実際の使用状況とを組み合わせで見定める必要があるのである。

そこで本稿では、前稿を引き継ぎ補う形で、改めて「はべり」の対者敬語化の程度に焦点をあてて『落窪物語』の「はべり」を検証することとする。

1.4 本稿の調査対象

表2に示したように、「はべり」使用率が中・高頻度の全26組から特殊な関係の4組を除いた22組の中には、「貴族

夫婦」2例と「同等・下向き」が1例ある。「同等・下向き」と分類されている1例は、同僚であり、表3に示した通りこれら夫婦2組と地下の同僚1組は、いずれも指数0.2以下で、全体の分布から見れば、「低頻度」につながる分布である。残る19組は「下位の話者から上位の聞き手へ」という「上向き発話」である。そのうち、0.25から0.48という、中間的な頻度に地下層の発話が集中している（表3網掛け部）。このグループは、《あこぎ(姪)→和泉守妻(叔母)》の1組を除き、いずれも「従者と貴族層である主人」という間柄である。逆に、地下の従者から貴族である主人に向けられた「はべり」は、すべてこの中頻度、0.25～0.43の間にさまる²⁰。他方、貴族層の発話は、低頻度から高頻度まで幅広く分布しつつ一部高頻度に集中しているといえる。今回本稿が対象とするのは、網掛け部、中頻度の「地下

表3 ハベリ使用頻度と関係・階層の相関

頻度		上向き		同等	
		地下層上向き	貴族間上向き	貴族夫婦	地下同等
中	0.10			蔵人→三の君	
	0.11		落窪弟→継母	権帥→四の君	
	0.20				雑色→雑色
	0.22		三の君→継母		
	0.23		落窪→落窪父		
	0.25	従者→男君			
	0.28	あこぎ→男君			
	0.31	帯刀→男君			
	0.33		落窪弟→落窪		
	0.38	あこぎ→継母			
	0.40	少納言女房→落窪			
	0.43	あこぎ→落窪			
	0.48	あこぎ→和泉守妻			
	0.58		四の君→落窪継母（母）		
	0.64		面白駒→男君（友人）		
	0.67		落窪→落窪継母（継母）		
高	0.7		男君→男君母（母）		
	0.71		男君→落窪父（舅）※		
	0.73		落窪兄→男君（義弟）		
	0.76		落窪父→男君（婿）※		
	1.35		男君→男君父（父）		

※《落窪父→男君》の関係は、家族関係上は下向きになるが、社会的関係としては上向きである。《男君→落窪父》はその逆ではあるが、両者の関係修復後、妻の父であるという関係が重視されており、双方が相手を上位待遇する関係である。

層の上向き発話」7組と貴族間高頻度²¹の5組である。検証にあたっては、どのような「はべり」が用いられているかという観点だけでなく、「はべり」が用いられていない部分との差異に着眼すべきだが、本稿では、そこで用いられている「はべり」の対者敬語化の程度を記述することにとどめ、不使用場面との比較は稿を改める。関係する人物については、図4の人物相関図で話者に網掛けを施し、聞き手を枠で囲んで示した。

2. 命題的意味（「あり」の意）の残存

まず、(I) 命題の意味、すなわち、「あり」の意味の残存についてであるが、前稿の調査によれば、高頻度の組の「はべり」には「あり」の意味がすでにない例が半数近くある。中頻度の地下層についても、表4に示したように、すべての関係において、「あり」の意味を残す例と残さない例がある。このように「はべり」の使用と「あり」の意味は関与しないかに見えるが、後で主語との関係を見ると、特に一般的事物を主語とする型の中で、「あり」の意味を生かして「はべり」を使用していると考えられるタイプ²²があるため、比較のためにも、分類して数を出しておくことは必要である。

表4 中頻度地下層「はべり」の「あり」の意味の残存

話し手→聞き手	「はべり」の数	「あり」の意味		
		残	残?	なし
あこぎ→男君	8	1		7
帯刀→男君	11	5	1	5
あこぎ→継母	6	4	1	1
従者→男君	1	1		
少納言女房→落窪	17	6	4	7
あこぎ→落窪	38	22	7	9

「あり」の残存の仕方としては、アスペクト的な要素は、「てはべり」のように助詞「て」があると明確であるが、「て」がなくても動作の存続等が疑われる(13)のような例がある。これらの類については、念のため「残?」に分類した。

(13) (あこぎ→落窪)「昨夜、いとあやしく思ひかけずて臥しはべりしほどに…」(昨夜は、不思議なことにうっかり寝ていたので)」(p.44)

なお、「あり」の意味の残存は文脈によって判断したので、「残?」としたものと、「残」との境界は連続的である。しかし一方で、「なし」の項目に分類されているものは、(14)

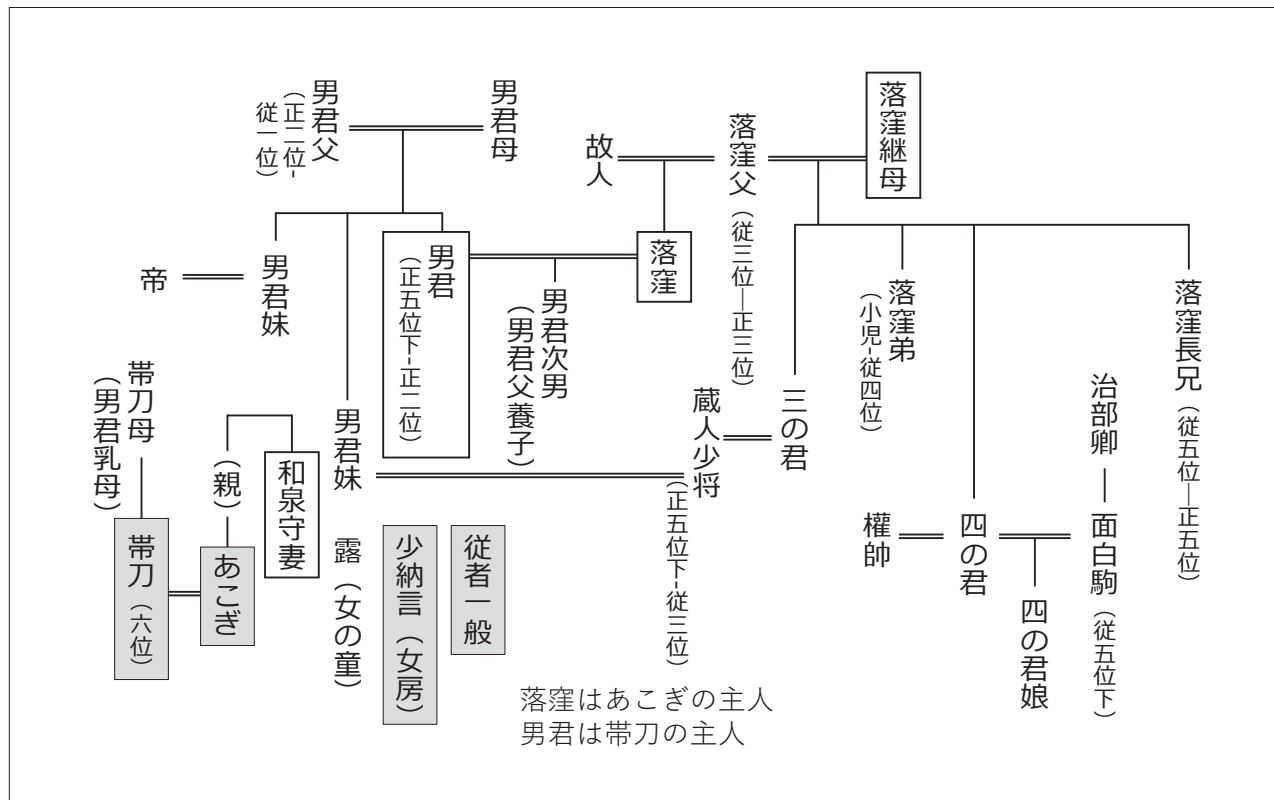


図4 人物相関図

のように、「あり」の意味を残さないと明確に判断されたものである（表4網掛け部分）。

- (14) (あこぎ→男君)「干しはべらむ」(濡れた御装束を干そ*²³う) (p.65)

3. 高頻度の「はべり」の主語

3.1 主語の意味の再整理と高頻度の概要

次に検証するのは、(Ⅱ) 発話現場的な意味がどれくらい関与しているか、すなわち、どのような範囲の語が主語となるかという問題である。前稿(森山2022b)の調査では、高頻度の関係では、話者および話者関係(話者身内、話者の事物)を主語とするものが大部分を占め、話者以外を主語とするものについても、「敵対者²⁴」を主語とするものを除くすべてが、【話者にとって】あるいは【話者のもと】という意味で用いられていた。これは、高頻度の「はべり」の使用が、「下位定位」あるいは、「話者に関する事柄」の範囲におさまるという興味深い結果である。

ただ、同稿では、【話者にとって】【話者のもと】という分類の説明が十分になされておらず、中頻度の従者から主人への「はべり」と比較するためには、再度明確な定義づけが必要である。また、前稿では高頻度のグループ全体の割合のみ提示したため、具体的な関係との相関がわからない。そこで、改めて表5²⁵に、高頻度の「はべり」の主語の分布の詳細を提示する。

主語の分類にあたっては、話者の関与を明確にするため、大きく「話者関係」と「話者関係以外」とに分けた上で、「話者関係主語」を①話者、②話者の身内(親族)または話者の従者²⁷、③話者が所有する事物や話者に関する事柄、に分け、「話者関係以外の主語」を④敵対者、⑤一般的事柄・

事物、⑥それ以外の他人、に分けた。以下具体的な内容を主語の分類に沿って説明する。

3.2 話者関係を主語とする「はべり」(高頻度)

①話者自身(50例)

話者自身を主語とするものは、「存在」を表すもの(15)や、形容詞等に接続して様子や気持ちを表すもの(16)、「あり」の意味を失って動詞に付されるもの(17)など多様である。数も多く、最も一般的な用法であるといえる。

- (15) (落窪父→男君)「(私が)世に今まで侍りつるが、心憂かりつるに…」(この世に今まで存在したのがつらかったが…) (p.249)

- (16) (落窪→落窪継母)「(私は)胸のいたくはべれば」(胸が痛い*ので) (p.122)

- (17) (男君→男君母)「これも、よも忘れはべらじ」(女君のことも、決して忘れ*ないだろう) (p.149)

なお、下向きの聞き手に向けて用いられた低頻度の「はべり」では、「存在」の意味のない3例の「はべり」が話者が主語であることを特別に強調する場面に集中すると述べた(森山2022b・c)が、上向き高頻度の「はべり」においては、(17)のように、特に話者が主語であることを強調しない文脈でも多数用いられている。

②話者の身内、従者(32例)

話者の子供や妻、弟などを主語として用いられた「はべり」が一定数存在する。(18)は子、(19)は妻、(20)は弟(少将、兵衛佐)が主語である。(21)はa bともに話者の父が主語であり、話者にとって下位者でない場合があることがわかる²⁸(この例では聞き手は主語よりもさらに上位者)。

表5 高頻度の組で用いられる「はべり」の主語

指数	話者→聞き手	総数	主語＝話者関係			主語＝話者関係以外		
			① 話者	② 身内・従者 ²⁶	③ 事柄・事物	④ 敵対者	⑤ 事柄・事物	⑥ 他人
0.7	男君→男君母	7	5	2				
0.71	男君→落窪父	24	12	9	1		2	
0.73	落窪兄→男君	16	7	5	2		2	
0.76	落窪父→男君	33	17	8	4		4	
1.35	男君→男君父	26	9	8	5	3	1	
合計		106	50	32	12	3	9	0
合計・割合			94 (88.7%)			3 (2.8%)	9 (8.5%)	

- (18) (男君→落窪父)「(息子は) 三になむなりはべりぬる」(息子は三歳になつ＊た) (p.246)
- (19) (男君→男君母)「(妻は) 人のやうに物ゆかしうもしはべらざめり」(妻は他の人のように何か見たがったりもし＊ないようだ) (p.196)
- (20) (男君→男君父)「少将、兵衛佐も(その様子を)見はべりき」(弟の少将や兵衛佐もそれを見＊た) (p.209)
- (21) a b (落窪兄→男君)「…(父が) みづからしおき a はべらぬことなりとも、殿にのみなむ、しろしめすべし。いはむや、さらに『わがかくしおく』など言ひおき b はべりしに違ひては」(故父が、自ら残し a ていないことでも、あなただけが遺産を領有なさるべきだ。ましてや、『自分がこうする』など言い残し b ＊たことに相違してはいけない) (p.292)

話者の従者が主語となる場合もある。(22) は、男君が落窪父一家との車争いの顛末について父に説明する発話の一部である。引用部分には4つの「はべり」があり、a、c、dが、話者である男君の側の従者の行為である。便宜上、話者身内と同項で分類しているが、bのように他者の従者を主語としても用いていることから、「身内」ではなく「下位者」として一括することも考えられる。

- (22) a c d (男君→男君父)「打杭打ち立て a はべりし所に立て b はべりし。男ども、『…』と言ひ c はべりしを、やがてただ言ひに言ひあがりて、車のとこしばりをなむ切りて d はべりける。…」
- (自分たちが内杭を立て a ＊たところに先方が車を立て b ＊た。自分の従者たちが「…」と言ひ c ＊たのを、そのまま言い募って、こちらの従者が車の床柱を切つ d ＊たのだ) (p.209)

③話者の所有物、話者に関する事柄(12例)

話者(または話者身内)の所有物や、話者に関する事柄が主語になる場合もある²⁹。(23) は、落窪父の遺品の石帯が主語、(24) は話者が「思うこと」という、「事柄」が主語となっている。

- (23) (落窪兄→男君)「(これらの石帯は) あやしう侍れども、昔人の言ひおきたまひしかばなむ」(つまらないものであるが、故人が言い置きなされたものなので) (p.290)
- (24) (落窪父→男君)「今は思ふこともはべらねば、命も惜しくはべらず」(今は私が思うこともないので、

命も惜しくない) (p.279)

なお、(25) (26) のように、その前の相手の話を受ける場合も、それが「話者についての事柄」である場合は、この分類に含める。

- (25) (男君→男君父) (お前に関するこういう訴えは本当かと問われて)「しか。(それは) まことにはべり。…」(そうだ。私が落窪父の転居を阻止したことは本当である) (p.222)
- (26) (落窪兄→男君)「さらにもさ侍らず」(決して、自分があなたに遠慮しているという事情ではない) (p.291)

3.3 話者関係以外を主語とする(高頻度)

3.3.1 下位の人物

④敵対者(3例)

話者と敵対する人物が主語となる「はべり」がある(森山2022b)。(27) (28) はともに男君から父親に対する発話で、「はべり」の主語はその場にいない落窪父(中納言)である。当時、男君も落窪父もどちらも従三位であるが、和解前のこの時点で、男君にとって落窪父は敵対関係にあたる。(22) bとは異なり、この場合は下位者と言えないので敵対者とする。

- (27) (男君→男君父)「人つかはしたりしに、にはかにかの中納言なむ渡らむとなむはべる³⁰と聞こえはべりつれば…」(人を遣わしたところ、急にあの中納言が引越してこようとあるとうわさがあったので) (p.222)
- (28) (男君→男君父)「券しらでつくりて、我より外に領る人あらじと侍るこそをこがましけれ」(地券を知らず家を造って、自分以外に領有する人がないだろうとあるのが愚かだ) (p.223)

3.3.2 一般的物事

ここまで説明した①から④は、話者または話者の身内や所有物、あるいは、敵対者が主語となるもので、「陪侍する」「貴人のもとに仕える」という実質的な意味から、「主語が低位である」という意味が切り出されたものと説明することができる。しかし、⑤に分類される9例は、話者やその身内に属するものでもなく、敵対者でもない、いわば「低位」の意を本来的に持たない一般的な事柄や物事が主語となった「はべり」である。前稿では、この「一般的な事柄や物事」を主語とする例はすべて、【話者のもとに】【話者にとって】という意味で用いられていると述べた。それは

つまり、話題の世界で話者との関わりを持っているということになる。以下、9例すべてについて詳しく説明する。

⑤一般の事柄・事物(9例)

⑤A 話者・話者身内のもとに「ある」(5例)

このタイプに属する例は5例である。本文中の「事物・事柄」にあたる部分に二重傍線を施した。ただし、「一般的事柄・事物」とは分類したものの、これらの例は「話者関係の事柄・事物」と連続的であり、両者を截然と分けるのは難しい。たとえば、(29)の例は、「○○という疑いが【話者のもとに】ある」という構造で、「疑い」を一般的事物と考える。その他も、(30)「物忌が【娘のもとに】ある」、(31)「かわいそうなことが【娘のもとに】ある」と解釈できる。これら「疑い」も、「物忌」も、「かわいそうなこと」は、一般的事物と考えることもできるが、同時に、「話者の疑い」「娘の物忌」「娘のかわいそうなこと」でもあり、「話者の事物」との間の境界が曖昧なのである³¹。そしてそれは、一般的事物であっても、【話者のもとに】あることで、「話者の事物」の延長上にあると考えられるということである。

(29) (落窪兄→男君)「もしそれを売り申してはべるにやあらむ。ただその疑ひのみ侍る」(もしかして落窪が地券を売ったのだろうか。ただその疑いだけがある) (p.226)

(30) (男君→落窪父)「また女子侍れど、今日はつつしむこと侍り。」(ほかに女の子がいるが、今日は物忌がある) (p.246)

(31) (落窪父→男君)「母具したる者は、『まづこれに』と言ふままに、まげられて、げにいとほしきことも侍りけむ」(母のいる子は、母親が『まづこの子に』と言うままに、その方に引かれて、本当にあの娘にはかわいそうなこともあっただろう) (p.244)

ただし、次の(32)「(邪魔をされるという) 気配が【話者のもとに】ない状態である」(33)「○○といううわさ(聞こえ)が【話者のもとに】ある」については、その「うわさ」は本来的に他者((30)の場合は聞き手)のものなので、「話者側でない事柄が話者のもとにある」典型例として考えることができる。そして、このような連続性こそが、対者敬語化を促進した可能性がある。

(32) (落窪兄→男君)「この家づくりはべること二年なり。そのほどまでは、音なくはべりて、かく妨げさせたまへば、いと安からずなむ」(この家を造

り始めて2年たつが、それまで気配もなかったのに…) (p.225)

(33) (男君→男君父)「(中納言が引越そうとしている)と聞こえはべりつれば」(…とうわさがあったので) (p.222)

⑤B 話者にとって(4例)

このタイプに属する例は4例ある。主語に二重下線を施した。(34)は、男君から贈られた高価な石帯を恐縮して返上する言葉で、「石帯」という一般的事物(あるいは聞き手の事物)が、「【話者(翁)の身には】闇夜の錦(のように過分なもの)だ」と、明確に「翁の身には」という言葉を用いて述べている。(35)(36) a bはいずれも話者の感想を述べるものである。(35)は、落窪父が男君邸で楽しく過ごしたあとの手紙の冒頭で、「時間の経過(暮れ行くこと)」という一般的事実が、【話者には】「惜しまれた」という自己の感想である。(36)は、男君が落窪父のために催した法華八講について泣きながら礼を述べる場面である。aは、法華八講が尊く「あはれ」であったと述べるのだが、「あはれ」は、『新編全集』が「感無量」と訳すように、発言者の深い感慨を表す語である。bは、とりわけ、「話者のために仏・経一巻を供養してくれた」という、聞き手(男君)の行動が、【話者にとって】「すばらしいことであつた」と述べるものである。

(34) (落窪父→男君)「御帯もさらにかかる翁の身には闇の夜にはべるべければ」 (p.253)

(35) (男君→落窪父)「昨日は、暮れゆく惜しくもはべりしかな(昨日は楽しくて日の暮れていくことが惜しくもあつたなあ。)」 (p.252)

(36) a b (落窪父→男君)「(法華八講が)いと尊くあはれに a はべりつることをば、さるものにて、…(中略)…『命のびて、老いの面目』とはおろかなり。翁のためには仏、経一巻を供養したまはむなむ、いみじきことに b 侍るべき。」(法華八講がたいへん尊く感慨深くあつたことは言うまでもなく…中略…『命も延びて老人の面目を施した』とは申すも愚かなことだ。私のために仏と経一巻を供養されたことは【話者にとって】大変なことである。) (p.267)

ただし、感想というものはそもそも【話者にとって】のものであり、「翁の身には」と限定している(34)や、個人の体験に基づく感想を述べる(35)は別として、(36) a bについては、【話者にとって】と限定する必要がないのではないかという考え方もあり得る。その限定が必要で

あるか否かは、一般的事柄・事物を主語とし、【話者のもとに】【話者にとって】とは言えない「はべり」が存在するかどうか、また、その有無が、「はべり」の使用者や使用場面との間に相関を持つかどうかということに関わってくるので、5節で改めて検討する。

4. 中頻度地下層の「はべり」の主語

4.1 話者関係を主語とする（中頻度）

中頻度地下層の「はべり」の主語を、高頻度の場合と同様の分類方法で分類した結果が表6である。図5にも示したように、全体的に話者関係の割合が減少し、逆に事柄事物の割合が増えている。また、話者関係以外の⑥「他人を主語とする」用例が、高頻度ではゼロであったのに、中頻度では6例存在する。

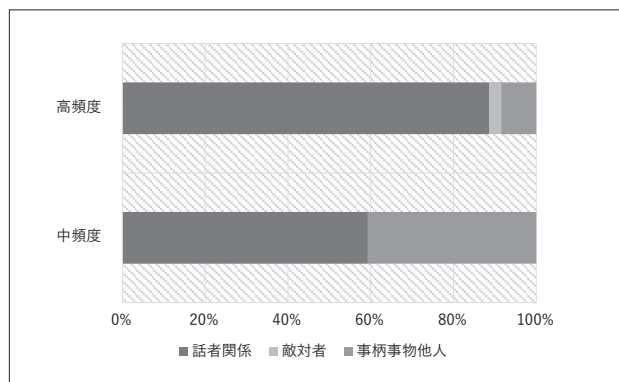


図5 話者関係を主語とする割合

①話者自身（47例）

高頻度の組と特に違いは認められない。ただし、そもそ

も話者を主語とする話題の量に違いがあるはずなので、今後、話者主語であって「はべり」を用いないものの割合を比較する必要がある。なお、(37)のように、謙譲語や下二段の「給ふ」に下接する例がいくつか見られる。同様の例は、数は少ないが高頻度貴族層の発話にも(38)(39)のように存在する³²。

(37) (少納言女房→落窪)「御あへしらひつかまつりは
べらむと思ひたまへはべりつるを」(p.92)

(38) (落窪父→男君)「賜はせたる券は賜はるまじきよしは、
聞こえはべりしを…」(p.253)

(39) (落窪兄→男君)「この家の券、失ひたまへはべり
て…」(p.225)

②話者の身内、従者（3例）

この類は高頻度に比べて極端に少なく、(40)話者のい
とこ、(41)話者の夫、(42)話者の知人の3例しかないが、
そもそも従者層が身内に言及する機会が少ないとも考えら
れる。なお、(42)は、あこぎの知人である他家の女房な
ので、話者と同じ従者層である。(22) a c dと併せて「話
者関係」の外に出し、「低位の人物」というカテゴリーを
作ることも考えられる³³ので、今後他の分析を進める中で
検討する。

(40) (少納言女房→あこぎ)「かの男君の御方に少将と
申すは、少納言がいとこに侍り」(その男君の邸
に仕えている少将という女房は、私少納言のいと
こである」(p.90)

(41) (あこぎ→落窪)「御文は(夫が)かうかうし侍り
にけり」(お手紙は、私の夫がこのようにし*た(紛
失した)」(p.79)

表6 中頻度地下層「はべり」の主語

指数	話し手→聞き手	総数	話者関係			話者関係以外		
			① 話者	② 身内・従者	③ 事柄・事物	④ 敵対者	⑤ 事柄・事物	⑥ 他人
0.28	あこぎ→男君	8	5				3	
0.31	帯刀→男君	11	4				5	2
0.38	あこぎ→落窪継母	6	3		2		1	
0.25	従者→男君	1					1	
0.40	少納言女房→落窪	17	12	1	1		3	
0.43	あこぎ→落窪	38	19	2	1		13	3
0.48	あこぎ→和泉守妻	10	4				5	1
合計・割合		91	54 (59.3%)			0%	37 (40.7%)	

- (42) (あこぎ→落窪)「かの殿なる人の、たしかに知る便ありて。(その知人が) 月をさへ定めて申し³⁴はべる」(大将殿に仕えている人で、確かに知っているつてがあって(ご結婚の話聞いた)。結婚の月まで決めて申し³⁴た (p.186)

③話者の所有物、話者に関する事柄（4例）

高頻度の場合と同じく、「一般的事物」の【話者にとって】と分類すべきものとの境界は曖昧である。たとえば、(43)は「話者の穢れがあった」と解し、(44)は「障りが起きること」、と解したが、(43)「穢れが話者にあった」、(44)「障りが話者の身にあった」と考えることもできる。(45)(46)については、それぞれ、(45)「話者の言葉」、(46)「話者の着物」である。

- (43) (あこぎ→落窪継母)「にはかにけがれはべりぬ」(p.31)
- (44) (あこぎ→落窪継母)「(障りがおきることは)よく侍るなり」(p.31)
- (45) (女房少納言→落窪)「聞こえさすれば、言よきやうにはべり。さりとて、聞こえさせねば…」(こう申し上げると、お世辞のようである。かといって、申し上げなければ…) (p.88)
- (46) 「かたじけなくとも、まだいたう身にも馴れはべらず」(恐れ多いが、この着物はまだ私の身に馴れていない(着古していない)) (p.50)

4.2 「話者関係以外」を主語とする（中頻度）

では、「話者関係以外」を主語とするものはどうか。貴族層同士の高頻度に「はべり」を使用する間柄では、「話者」と関係しない「はべり」が11.3%³⁵しかないのに対して、地下層の上向き発話では40.7%を占めている。このように、地下層の「はべり」で、話者に関わりのない「はべり」が多く使われているのは対者敬語化と関わりがあるのだろうか。また、貴族層高頻度の場合、⑤のすべての例が、A【話者のもとに】あるいはB【話者にとって】という文脈の中におさまっていたが、中頻度の地下層ではどうか。さらに、高頻度でゼロであった⑥「他人」の項目の6例はどういったものか。

⑤A 話者のもとにある（8例）

⑤話者関係以外の事柄・事物を主語とする「はべり」31例のうち、【話者のもとに】という意味を持つ「はべり」は8例ある。そのうち5例は、(47)「落窪の鏡の箱」、(48)

「男君からあなたへの手紙」、(49)「餅の入用」、(50)「急ぐこと」、(51)「借りていた物」のように、実質的な事物や事柄が【話者のもとに】あることを示している。

- (47) (あこぎ→男君)「衛門がもとに侍り」(私のもとに鏡の箱はある) (p.231)
- (48) (あこぎ→落窪)「ここに御文侍るめり」(ここに男君からの手紙があるようだ) (p.44)
- (49) (あこぎ→和泉守妻)「今宵餅なむ、いとあやしきさまにて、用侍る」
- (50) (あこぎ→和泉守妻)「急ぐこと侍りてなむ」(急ぐことがあって) (p.143)
- (51) (あこぎ→和泉守妻)「されば、この物どもはしばし侍るべきを」(では、あなたから借りていたこれらの物は、しばらくここにあってほしいのだが) (p.55)

残る3例は、(52)(53)(54)のように、他者からの伝言の内容を省略して伝える時に半ば定型的に用いられている。

- (52) (あこぎ→落窪)「少将の君おはしたり。(中略)かうかうなむ侍りつる」(男君が来られた。…このように(伝言が)あった) (p.109)

上の(52)は、その前に男君が「こうこうと申し上げよ」とあこぎに言い置いた内容を伝えている。実際の「伝言」があこぎの元にあるのに対して、次の(53)(54)は、いずれも、(53)「継母のたくらみによって、こういう計画が行われている」、(54)「男君は4月に右大臣家の娘と結婚をする準備をしている」という情報を、あこぎ自らが察知して収集し、落窪に教える場面である。

- (53) (54)で存在するのはあくまで「情報」であって、事物や事柄といった実態のあるものではない。
- (53) (あこぎ→落窪)「かうかうのこと侍るなり。さる用意せさせたまひて」(こういったことがある。用意をなされよ) (p.121)
- (54) (あこぎ→落窪)「かうかうこそ侍るなれ。さは知ろし召したるや」(こういったことがある。そうだとはいふ存知か) (p.186)

⑤B 話者にとって（6例）

話者の感想や実感、認識を述べる【話者にとって】という文脈のもとに「はべり」が使われている例が6例ある。

(55)は、落窪との仲をとりもつてくれと男君に頼まれた帯刀が、それは「【話者には】難しい」と答える。(56)は、雨で行けないと言っていた男君が、やはり自分も行こうと言った言葉を受け「【話者にとって】その決断はよい

ことだ」と述べている。(57)は、女房少納言が、「そのようなことをすると、世間の口が【話者にとって】うるさいのでできない」と、落窪に述べる。(58)は、噂話が「【話者にとって】興味深かった」と伝える場面、(59) a bは、この数年「【話者にとって】つらかった事の中でもとりわけ今回の事件が辛い」と述べる場面である。

- (55) (帯刀→男君)「人の御心も知らず、いと難きことにぞ侍る」(姫君のお気持ちわからず仲介することとは【話者にとって】難しいことである)(p.35)
- (56) (帯刀→男君)「(男君が雨の中落窪のところに行こうと言ったことが)いとようはべるなり」(【話者にとって】とてもよい)(p.61)
- (57) (女房少納言→落窪)「世の中うたてわづらはしうはべれば、つつましくてなむ」(世間の口が悪く【話者にとって】わずらわしい*ので、あなたに仕えることがはばかれる)(p.88)
- (58) (女房少納言→落窪)「(残りの話も)艶にをかしうてはべりし」つやめいていて、【話者にとって】興味深い話であった)(p.92)
- (59) a b (あこぎ→落窪)「この年ごろいみじく a はべりつることの中に、わびしくもいみじくも b はべるかな」(この事態は、長年【話者にとって】ひどかつ a *たことの中でもとりわけ、【話者にとって】悲しくもひどくも b あるなあ)(p.125)

⑤C 話者の判断を表す(10例)

高頻度の組の、「話者以外の事柄事物」を主語とする「はべり」は、上記A・Bのどちらかで解釈できた。しかし、中頻度の組では、A【話者のもとに】B【話者にとって】という意味では解釈しきれない例がある。ただし、そのうち下記の(60)から(68)の10例は、A・Bの意味はなくとも、「【話者には】こう思われる」、「〇〇である【と話者は考える】」といった、C【話者の判断】の「はべり」であるといえる。

- (60) (女房少納言→落窪)「(姉妹たちまでが落窪をいじめることは)げにこそ、あやしうは侍れ」(本当に不思議だ【と話者は思う】)(p.88)
- (61) (あこぎ→落窪)「(典薬助が忍んでくることは)いみじくこそはべれ」(典薬助が忍んでくるとは大変である【と話者は思う】)(p.121)
- (62) (男君→あこぎ) (中納言邸から女房を引き抜く提案をされて)、「いとよくはべりなむ」(その案はとてもよいことである【と話者は思う】)(p.214)
- (63) (あこぎ→落窪)「(その箱は)いとうたて、げに

はべり」(その継母からもらった箱は変である【と話者は思う】)(p.74)

- (64) (あこぎ→落窪)「(あなたの言うことは)げにとわりにはべれど」(あなたの言うことは本当にもっともである【と話者は思う】が)(p.45)
- (65) (あこぎ→落窪)「(絵のことを男君がご存知なのは)帯刀がもとに、しかしか言ひてはべりけるを御覧じつけけるにはべるめり」(男君がご存知なのは、私が帯刀にこう言ったのを男君がご覧になったのである【と話者は思う】ようだ)(p.33)
- (66) (あこぎ→落窪)「(あの鏡箱は)まめやかにはをかしくこそはべれ。奉りたまはむとこそ、なからめ」(あの鏡箱は、本当にすばらしいことである【と話者は思う】)(p.72)
- (67) a b (帯刀→男君)「さも a 侍るべき折にこそは、b 侍るめれ」(今が、まさにそう a ある【と話者は思う】時で b ある【と話者は思う】)(p.32)
- (68) (帯刀→男君)「殿はいと遠くなりはべりぬ。行く先はいと近し」(お屋敷はとても遠くなっ*た【と話者は思う】。行く先はとても近い)(p.63)

もっともB【話者にとって】〇〇だ」という文脈は、C【話者にとって】〇〇だ【と話者は思う】】わけであるから、BはCに含まれる、あるいは、Bの拡張がCであり、その線引きは難しい。また、文脈の解釈によって、BともCとも考え得る場合がある。たとえば、(61)典薬助が忍んでくることについて「いみじくこそはべり」とあるのを、【〇〇と話者は思う】と解釈したのは、客観的事態として「この事態は大変だ」と述べていると解釈したためだが、その事態についてあこぎが心を痛めて「この事態はひどくつらい」と述べているのならば、⑤B(59) a bと同様、【話者にとって】と解釈される。また、(61)の「いとよくはべりなむ」という賛意の表し方も、⑤Bの(56)と同様に、中納言邸から女房が来ることを「【話者にとって】とてもよい」と解釈することは可能だ。ただしこの場合は、「なむ」という推量の表現があることから、「その案はきつととてもよいだろう【と話者は思う】」と解釈した。このように、⑤Bの類と⑤Cの類の境界は一部連続的であるが、(60)(63)～(68)のように、B【話者にとって】とは解釈し得ないC【〇〇と話者は思う】の例があるので、高頻度よりも拡張した「はべり」の用法が、中頻度の地下層に見出されるといえる。

⑤D 聞き手のもとにある(4例)

ここまでの「はべり」は、「一般的事物」を主語として

いても、「話者」と何らかの関わりを持って用いられている。しかし、⑤「一般的事柄・事実」を主語とする「はべり」の中には、さらに、上記A・B・Cにも当てはまらない7例の「はべり」がある。

そのうち、次の3例は、【聞き手のもとにある】「はべり」（図6）である。

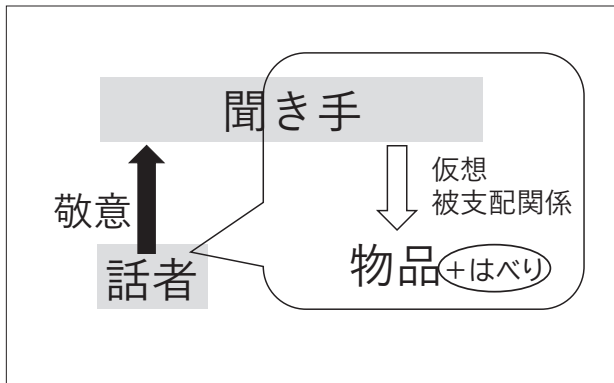


図6 聞き手のもとに存在する

(69) (あこぎ→和泉守妻)「(几帳や夜具など) さるべきや侍る。」(あなたのものに、しかるべき几帳や夜具はあるか。)(p.51)

(70) (あこぎ→和泉守妻)「取り交すべきくだ物など侍りぬべくは、少し賜はせよ」(餅に取り合わせるることのできる菓子などあるようならば、少し下されよ)(p.55)

(71) (従者→男君)「(車は) 御門に侍り」(車は御門にある)(p.54)

(69)(70)は、いずれも、あこぎが婚礼の準備をするために、叔母である和泉守妻に様々な物を用立ててくれるよう依頼する手紙で、「几帳や夜具があるか」と尋ねたり、「菓子があればくれ」と言っている几帳等や菓子は、手紙の読み手である和泉守妻のもとに存在する、和泉守に属する物である。

また、(71)は、車夫を下位待遇した「はべり」とも考えられるが、男君のために用意した車が来たことを伝えているわけであるから、「あなたのものに」と考えるのが自然であろう。

これらの例は、本来の「侍り」が有していた「貴人のもとに存在」という意味を事物に適用し、その事物の所有者(仮想支配者)である人物に敬意を表したものであり、「はべり」が「存在」の意味を持つからこそ可能であった用法であるといえる。そして、話題の中と発話現場の両方にまたがる人物として聞き手が関与しており、「対者敬語化」

は完成していない。そして、(72)の「はべり」は、落窪から預かった手紙を帯刀が紛失してしまったので、申し訳ないが「先ほどあったように」書いてくれと頼む場面である。

(72) (あこぎ→姫君)「面恥づかしきやうなれど、侍りつるやうに御文書かせたまひて、賜はらむ」(恥づかしいようだが、さきほどあった*ようにお手紙をお書きなさって頂戴しましょう」(p.79)

「先ほどあったように」とは、「あなたのもとに存在した」と解釈できる。しかし、文脈上、「以前あったように」という意味なので、「聞き手のもとに」という意味合いすらなくなっているとも考えることもできる。その場合は、「対者敬語化」が完成していると言える。

⑤E 話者の情報(3例)

そして、次の3例の「はべり」は、話者や聞き手と、話題の中では関わりを持つことなく用いられたものである。

(73)は、閉じ込められている落窪の部屋の戸がまだ開かないことをあこぎが男君に報告する場面、(74)は、落窪が物忌だと伝えて、継母が部屋に入るのを防ごうとする場面、(75)は、「寝ている間に夜が明けてしまった」と言い訳をする場面である。

(73) (あこぎ→帯刀)「戸はいまだあきはべらず」(戸はまだあか*ない)(p.114)

(74) (あこぎ→落窪継母)「今日明日(姫君の)御物忌に侍る」(今日と明日は姫君の御物忌である)(p.70)

(75) (あこぎ→落窪)「思ひがけず伏してはべりしほどに、はかなく明けはべりにけり」(うっかり横になっているうちに、いつの間にか夜があけ*てしまった)(p.44)

これらの「はべり」は、話者関係や、下位者や敵対者を主語としない。また、【話者のもとに】という意味も【聞き手のもとに】【話者にとって】という意味もない。そして、「戸があかない」「物忌だ」「夜が明けた」ことについて、その場で、【…と話者が思う】わけではないため、【話者の判断】でもない。

これら3例は、すでに行った判断を、聞き手に「報告(伝達)」する文である。つまり、「戸があかない」「物忌である」「世が明けた」というのは、【話者の情報】である。【話者の情報】としての「はべり」は、「情報」そのものの、すなわち、「吹き出しの外」にマークされる(図7)。これは、【話者のもとに】【話者にとって】【〇〇と話者は思う】といった、話者自身が登場人物となる場合とは異なり、話題の世界の外、伝達場面での標識であり、「対者敬語化」した

姿であるといえる。

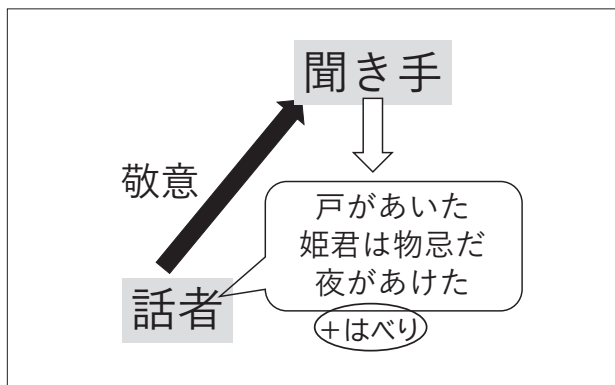


図7 話者の情報+はべり

⑥他人（6例）

最後に、中頻度地下層には、「他人」を主語とする「はべり」が6例あった。「他人」とは、話者側の人物ではなく、また、下位者、敵対者でもなく、一般的事柄事物でもない、すなわち、下位ではない他者である。具体的には、(帯刀→男君)の発言における落窪(76)(77)、(あこぎ→落窪)の発言における、聞き手(落窪)(78)(79)・落窪の後見人に当たる人物(80)が該当し、いずれも「上位者」でもなく「下位者」でもない(なお、(81)(あこぎ→和泉守妻)の発言における「客」もそうだが、この例は「下位者」である可能性もある)。これら6つの例のうち、(76)(77)(78)(79)は、C【話者の判断】、(80)はD【聞き手のもとにある】、(81)はE【話者の情報】(または「下位者」と分類できる。

C【話者の判断】

- (76) (帯刀→男君)「ほどなく、いとほしくぞ侍らむかし」(通い始めて間がないのに、落窪がかわいそうであるだろう【と話者は思う】)(p.58)
- (77) (帯刀→男君)「さ侍れど、あやになる雨はいかがはせむ」(そう(落窪が可哀そう)である【と話者は思う】が・・・)(p.58)
- (78) (あこぎ→落窪)「(あなたは)『…』とおもほすにこそはべるめれ」(あなたは、「…」とお思いになるのである【と話者は思う】ようだ)(p.44)
- (79) (あこぎ→落窪)「(あなたに)さぶらはむもいとほしふはべり」(私がお仕えるのも、とてもお気の毒だ【と話者は思う】)(p.45)

これらは、訳に示した通り、【と話者は思う】を補って訳すことのできる文脈である。

D【聞き手のもとにある】

(80)は、「落窪を後見する人」が「聞き手である落窪のもとにあるならばいいのだが」という意味で、姫君に仕えるべき不特定の「後見人」を主語にしており、図6と同じ構造である。

- (80) (あこぎ→落窪)「また見知る人の侍らばこそあらめ、いかがはせむ」(また、後見する人があればこそよいが、どうしよう)(p.50)

E【話者の情報】または②話者の身内

(81)は、「客は、予想外に長期にわたる方違えのための滞在であった」という情報を、和泉守妻に対して言い訳として伝える、【話者の情報】と考えられる。一方、自分の客を身内として待遇しているという可能性もあり、さらに検討が必要である。

- (81) (あこぎ→和泉守妻)「(客の滞在は少しの間だと思っていたが)四十五日の方違ふるになむ侍りける」(客は45日間の方違えであった)(p.55)

このように、中頻度の地下層において、話者以外が主語となるものについては、A【話者のもとに】、B【話者にとって】、C【〇〇と話者は思う(話者の判断)】、D【聞き手のもとに】、E【話者の情報】というカテゴリーの中に整理することが可能である。

5. 高頻度の「はべり」との比較とまとめ

最後に、中頻度の地下層に見られた「はべり」と、高頻度の貴族層で見られた「はべり」の違いを確認しておく。

まず、高頻度の「はべり」の分析では区別していなかった、⑤B【話者にとって】という文脈と、⑤C【〇〇と話者は思う(話者の判断)】という文脈との区別を、改めて高頻度の例にあてはめるとどうなるであろうか。Cの意味はどちらにもあるので、Bの意味で解釈可能かどうかが問題になる。

高頻度の「はべり」の「話者関係以外の事柄・事物」を主語とするもののうち、(34)「翁の身には闇の夜にはべる」は、「翁の身には」と述べていることから、【話者にとって】という意味が確認できる。(35)も、夕暮れ一般が「惜しい」のではなく、昨日が楽しかったが故に「惜しいと感じた」と述べるわけであるから、【話者にとって】と解せられる。法華八講について落窪父が感想を述べた、(36) a bは、【〇〇と話者は思う】という客観的な判断だと見ることももちろん可能ではあるが、落窪父の深い感動を表した【話者にとって】という感想だととることも可能であり、Bに収ま

らない例はない。

このように、『落窪物語』において高頻度で「はべり」を使用する5組、すなわち、《男君→男君父》、《男君→落窪父》《男君→男君母》、《落窪兄→男君》《落窪父→男君》という、貴族同士の上向きの関係での「はべり」は、話者関係を主語とする「はべり」が約89%を占める。そして、残り11%の、話者以外を主語とする例はすべて、A【話者のもとに】、B【話者にとって】という意味の範囲におさまる。

そして、中頻度の地下層で用いられる「はべり」には、A・Bのほかに、C【〇〇と話者は思う（話者の判断）】、D【聞き手のもとにある】、E【話者の情報】と解釈しなければならない用法が見出される。Cは話し手が、Dは聞き手が話題に関与するが、E【話者の情報】は、発話場面の話者と聞き手との関係で完結する。一つの作品の中に、このような多様な「はべり」が共存し、発話場面で完結する「対者敬語」としての「はべり」は、その中の一形態（E）であることが明らかになった。

一方、高頻度で「はべり」を使用する貴族層の発話の中に、CとEのタイプが見られないという現象は、もし一般化できるのならば、「対者敬語」の成立をめぐる、社会言語学的な視点としても極めて興味深い。ただし、何度も述べてきたように、敬語の使用条件を確定するためには、その敬語が「使われていない」場合との比較も必須である。たとえば、高頻度の貴族層には、自身を主語とする発話が多く、かつ、情報の伝達よりも自身の心情を述べる話題が多かったためにEタイプの出現がなかっただけであるということも十分考えられる³⁶。

今後は、本稿で分類した「はべり」の使用型をベースに、「はべり」の不使用条件も視野にいれつつ、中頻度で「はべり」を使用する貴族層での使用実態はもちろん、同時代の他作品では、C【話者の判断】、E【話者の情報】の「はべり」が、他にどのような関係で用いられているかを確かめることが課題となる。

注

1 「敬意」が何かという問題については稿を改めて詳しく述べる準備をしている（森山2022c）ので、ここでは触れない。ただし、かつて素材敬語について「上下」（森山2010）や「力（power）」（森山由紀子・鈴木亮子2011）といった言葉を用いた説明は不十分であると考えている。

2 補注で、本稿冒頭①に相当する点で現代敬語と大きな違いがあると述べられている。

3 小田勝（2022）の最終的な分類において、c（自卑敬語）は「文の素材としての主語（通常は述者）と、対話の場における対者との上下関係を規定する語」として、「B素材対者関係規定語」の「（1）主語下位語」とされる。その結果「小田勝2015では1（c）のいわゆる自卑敬語を「対者敬語」に分類しているが、ここに考えを改める」と記される。なお、「d 丁寧語」と「e 対者尊敬語」についてはそのまま「丁寧語／丁寧語」として「C対者敬語」に分類される。

4 注3参照。

5 小田勝（2015・2022）では、「はべり」が「給ふる」に下接し得るということも、「はべり」と「給ふる」を区別する要因となっている。（37）（39）参照。

6 「話者が畏まり遜る」ならば「自卑性を捨てて」いのではないかという議論になるが、「自卑性を捨てて」という言葉は、その前の「c 自卑敬語」との区別を表すための記述である。「c 自卑敬語」は注3に示した通り、同論中で、「文の素材としての主語（通常は述者）と、対話の場における対者との上下関係を規定する語」として「対者敬語」とは区別されるので、それに従い、「対者敬語という機能を獲得し」などと改めるべきであろうか。

7 小田勝（2015）の引用による。（9）も同じ。

8 森山（2004a、2004b、2010、2011a、2011b、2014）でも考察を重ねてきた。

9 被支配待遇において支配者は格関係のような直接的で明確な関係を当該動詞との間に有しない。その点で、いわゆる謙譲語Ⅰ（「補語尊敬語」小田勝2022）とは区別される。そこで、謙譲語Ⅰ（「補語尊敬語」）と被支配待遇を併せて「非主語尊敬」（森山2003）とまとめることができる。

10 森山（2010、2011b）では、「仮想被支配待遇」と呼んだが、あくまで「転用」なので、「仮想被支配用法」と改める。

11 森山（2010）では、『古今和歌集』の詞書の「はべり」は、その成立段階で「あり」の意味を有していたことを指摘した。ただし、それに該当する段階が対話場面に存在したことは明確には認められない。

12 特別に名前のない従者や女房は「従者」として一括した。

13 1 発話の認定は、基本的に『新編日本古典文学全集』

- (小学館)のかぎ括弧の始点と終点に従い、『新日本古典文学大系』(岩波書店)も参考に、若干の修正を加えた。4発話以上としたのは、発話数が少なれば指数の精度が低くなるためである。
- 14 複数から複数への発言は除外した。
- 15 「1文」の認定も、注13の発話に準じ、同書の句点を基準とした。
- 16 ランク付けはあくまで目安のための仮のものである。複数話者、複数聞き手の扱いを変更したため、前稿と若干総数が変わっている。また、「給ふる」については後に論ずることとして、今回は「ハベリ」の数によってのみ分類した。
- 17 前稿は、「対者敬語化の過程」ではなく、「下位者への敬語使用」の解明を第一の目的としていたためである。
- 18 落窪の弟は、成人初期の段階では地下層とすべきであるが、落窪父一家はすべて「貴族層」として扱った。和泉守妻は小国の国司である和泉守の位階に準じ、地下層とする。
- 19 「特殊」の欄は、《男君→帯刀母》という、乳母でもあり部下の母親でもある関係であるなど、上下関係が判断できないものである。具体的には、次の関係を「特殊」と判断した。無：あこぎ→落窪長兄、あこぎ→典薬助、落窪継母→典薬助、典薬助→あこぎ／低：男君→帯刀母／中：落窪父→落窪、落窪継母→落窪、落窪長兄→あこぎ、典薬助→落窪。典薬助は、地下層の老人であるが、落窪継母の叔父である。前稿で合計数に不整合が生じていたのは、「特殊」と「独白」のカテゴリの表記を省略したためである。
- 20 表1を見ると、上向きの地下層話者には、低頻度で「はべり」を用いた組が1組あるが、これは《帯刀→帯刀母》(親子)という、地下層内の家族間の関係である。
- 21 高頻度の「はべり」については、前稿で一度検討したものをふまえ、中頻度と明確に対比できるよう、分類方法等を若干修正する。
- 22 中頻度の⑤C (60)～(68)、⑤D (69)～(71)など。
- 23 本稿では、特に「はべり」に関わる部分については、できるだけ原文に忠実な訳を心がけるが、「あり」の意味がなくなっている場合、訳文中では該当箇所※を付す。
- 24 前稿では「下位者」としたが、整理し直したうえで、より厳密に「敵対者」とする。
- 25 分類の方針を明確にした結果、前稿と数値が変更されている部分がある。特に、「話者以外の事柄・事物」とした上で、【話者のもとに】と分類していたものの中には、本来「話者の身内」や「話者の事物」と整理しておくべきものが含まれていたため、次の通り修正した。(落窪兄→男君)「この家領すべき人はべらぬ」：前稿では、「この家を領有すべき人」という一般物が「自分のもとにいない」と考えたが、「この家を領すべき人」というのは落窪のことであり、「話者身内」とする。(男君→男君父)「ものしき心のみ侍りしかば」：一般的的事物「ものしき心」が「話者のもとにある」と解したが、「心」は本来話者のものであるため「話者の事物」とする。(男君→男君父)「券いと確かにはべり」：「券が話者のもとにある」と解したが、話者は「券」を自分のものであると主張しているわけであるから、「話者の事物」とする。(落窪父→男君)「(昨日伺おうとしたが、方の塞がりてはべりしかばなむ)：「方」が「話者にとって塞がっている」としたが、本来、話者の方角なので「話者の事柄事物」とする。そのほかにもいくつかの修正を加えたが、結果に修正を加える必要はない。
- 26 「話者の従者」については、「話者関係」の外に出し、(42)の例も併せて「低位の知人」とすべきかもしれない。今後、例が増えていく中で修正していく。
- 27 注25参照。
- 28 上位の聞き手に対する身内への素材敬語の使用抑制、同時に下位定位でもあるように見えるが、この発言の前に位置し、同じく男君に向かって父の遺産について言及する(23)の発言では、父に尊敬語を用いているので、他の用例も含めて検証する必要がある。
- 29 前稿の分類方針を整理した項目である。注23参照。
- 30 使者から話者への言葉の直接話法による引用ならば自敬表現となるので、間接話法と解釈する。
- 31 注23に説明した通り、本来的に話者に属するものは③に変更したが、「物忌」はどうなのかなど、まだ連続性は残る。
- 32 注5参照。
- 33 注26参照。
- 34 「申す」の敬意の対象は、あこぎとは考えられないので、聞き手である落窪だと想定される。
- 35 しかも貴族層では、「敵対者」を含んでこの数値である。
- 36 森山(2022b)でも述べた通り、『蜻蛉日記』では道綱が母に対して「新型はべり」を用いている例があり、「対者敬語」の成立を使用者の階層と関連付けるのは

早計である。

【引用文献】

- 石坂正蔵（1933）「書紀古訓の「ハヘリ」「ハムヘリ」の解釈」『国語と国文学』10-3初出、（1934）『敬語史論考』大八州出版
- 小田勝（2015）『実例詳解古典文法総覧』和泉書店
- 小田勝（2022）「古典敬語の特質と関係規定語の問題」近藤泰弘・澤田淳（編）『敬語の文法と語用論』開拓社
- 阪倉篤義（1952）「『侍り』の性格」『国語国文21-10』京都大学国文学会
- 森山由紀子（2003）「謙讓語から見た敬語史、丁寧語から見た敬語史—「尊者定位」から「自己定位」へ—」菊地康人（編）『朝倉日本語講座8』朝倉書店
- 森山由紀子（2004a）「平安中期の『侍り』をめぐって—『蜻蛉日記』の全会話調査から—」『同志社女子大学日本語日本文学16』同志社女子大学日本日本文学会
- 森山由紀子（2004b）「親族間の会話における『侍り』の用法—『蜻蛉日記』の全会話調査から—」『同志社女子大学学術研究年報55』
- 森山由紀子（2010）「『古今和歌集』詞書の「ハベリ」の解釈—被支配待遇と丁寧語の境界をめぐって—」『日本語の研究6-1』日本語学会
- 森山由紀子（2011）「『源氏物語』にみる『はべり』の表現価値試論—敬語形式の確立と意味の重層性」森一郎・岩佐美代子・坂本共典（編）『源氏物語の展望第十輯』三弥井書店
- 森山由紀子（2022a）「10世紀末『落窪物語』における下位への対面素材敬語—発話場面の文脈との関わりから—」近藤泰弘・澤田淳（編）『敬語の文法と語用論』開拓社
- 森山由紀子（2022b）「10世紀末『落窪物語』の「はべり」—関係別使用頻度と丁寧語化の実態—」『同志社女子大学日本語日本文学34』
- 森山由紀子（2022c）「平安和文における素材敬語と対者敬語の「意味」—語用論的意味の違いを端緒として—」日本語学会2022年度秋季大会口頭発表
- 森山由紀子・鈴木亮子（2011）「日本語における聞き手敬語の起源—素材敬語の転用」高田博行・椎名美智・小野寺典子（編）『歴史語用論入門—過去のコミュニケーションを復元する—』大修館書店
- テキストの引用は特に断りのない限り『新編日本古典文学全集』（小学館）によった。

